

中国語授業における歌の活用の有効性について

小川 快之

1、はじめに

中国語の授業では、従来から歌が活用されてきた。最近では、ポップスの活用も積極的に行われている⁽¹⁾。古川典代氏は、こうした歌の活用は大学の第二外国語の学習意欲が低い学生を中国語の世界に誘うための手法として有効であると述べている⁽²⁾。しかし、そうした授業方法やその教育的効果については古川氏や俞稔生氏の研究などがあるものの⁽³⁾、あまり検証・考察されていないのが現状であるように思われる。中国語の歌の活用の教育的効果については、しばしば「学生の緊張を和らげる」「授業の雰囲気をごませる」といった指摘がされているが、効果はそれだけなのか。古川氏が論じている中国語に対する興味の向上も含め、さらに検証してみる必要があると感じられる。一方で、英語の授業に関してはポップスを使った教科書の開発なども積極的に行われ、その教育的有効性についてもさまざまな研究が出されている⁽⁴⁾。そこで本稿では、英語の授業における歌の活用に関する研究も参考にしながら、また、千葉大学・初修外国語（中国語）の授業での事例も検証しながら、主に大学の初級中国語の授業における歌の活用方法とその教育的有効性について考えてみたい。

2、中国語の歌と「声調みだれ」問題

周知のように、中国語の歌は、歌のメロディーの影響により声調（四声）がみだれる傾向がある。また、声調だけではなくピンイン（表音文字）がみだれる場合もある。例えば、苏慧伦（ターシー・スー）の「鸭子」（アヒル←韓国の歌：JuJu Clubの「私は私」のカバー曲）の一節「明明是, 好天气却感觉下雨的情绪」（明らかに、良い天気なのにかえって雨のような気分になっています）の「天气」は、「ティエン・チ」ではなく「ティ・チ」に聞こえる。実際、そう歌わないとうまく歌えない。声調の問題についてはすでに俞稔生氏が本格的な検討を行っている⁽⁵⁾。氏は、「音節を音譜に合わせて歌うだけで、歌詞の四声は必要ない」と説明されることが多いと指摘した上で、「いろんな中国の歌を口ずさんでも、歌詞の漢字が脳裏をかすめ、その意味を思い浮かべるのはなぜであろうか」と指摘し、「鉄腕アトム」等の歌がどのように歌われているかを検証して、「歌には音譜があることで、中国語に本来ある声調が大きく影響を受けるが、全く四声と関係ないとまでは言いきれず、歌詞に意味がある以上、音譜に合わせる歌詞を選択する際に、声調もある程度考慮されるのではないかと述べている。池田巧氏も、「歌ではいくらメロディー優先で声調は問題にしないとは言っても、たとえば低い音のところに「高 [gao]（高い）」という第1声の

高く発音される単語を当ててしまうと、耳にはどうしても「搞 [gao] (する、やる) (第3声—引用者)」に聞こえてしまう、という弊害が生じるのも事実。そこで中国語の歌作りではメロディーの音の高さに歌詞が自然に乗るように工夫が凝らされていることが多い」と述べている⁽⁶⁾。具体的な検証がさらに必要であるが、以上の指摘から、歌では四声のみだれてはいるが、だからと言って四声を見捨てているわけではないらしいということは確認できる。また、これも周知のことであるが、中国語の歌では一部の言葉を別の音声で発音することがある。一般に「本来軽声で軽く発音する“了le”は、歌では往々にして“了liao”とその存在をはっきり主張することが多いのです。同様に“的de”も、“的di”と発音されてメロディに紛れてしまわないようにしているのです」(古古典代氏)などと説明される⁽⁷⁾。ただ、ポップスではこのようになっていない場合も多い。では、こうした問題があるので、歌は中国語授業の教材として使わないほうがよいのであろうか。それとも以上のような問題に留意しつつも授業で活用した方がよいのであろうか。以下でさらに考えてみたい。

3、中国語の歌の練習とプロソディ（「音節の長さ」「声調の高さ」）学習

中国語の音節については、「発話の中での音節の時間的長さは画一的ではなく、声調によって長短がある。声調の高さは3音節以上の言葉や文になると複雑に変わるので、声調の高さを機械的に発音すると不自然な発音になる。〈強さアクセント〉〈イントネーション＝文音調〉などによってくいちがいがあるので、一口に声調といっても実際にはいろいろな変種で発音される」(望月八十吉氏。引用者要約)などと説明される⁽⁸⁾。また、中国語には中国語独特のリズム・イントネーション・ストレス・ポーズなどの音声(音韻)要素＝「プロソディ」があり、個別の音は多少ずれても、全体の流れがその言語のものとなっている場合のほうが、逆の場合よりは通じやすいと言われる⁽⁹⁾。さらに加藤徹氏は、「日本語では、「ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、…」などの音節は、基本的にはどれも同じ長さに発音しなければなりませんし、短音は1拍、長音は2拍と、長さがキッチリと決まっています。これと対照的に、中国語では、音節の発音の長さがバラバラです」「日本人がしゃべる中国語のリズムは、中国人の耳にはぎこちなく響くことが多いようです。その理由は、日本人は、中国語の音節を、日本語のくせで、同じ長さで発音してしまいがちだからです」と述べ、こうした中国語の発音の微妙なリズムを習得する際には歌を歌うことが有効であると指摘している⁽¹⁰⁾。同様な指摘は英語の歌についてもなされている。例えば早瀬光秋・金冶隆司両氏は、歌を中心に英語の授業を進める最大のポイントは、その曲のリズムやメロディーの助けを借りて英語の持つリズムや発音を習得すること、言い換えれば日本語特有の拍のリズムを矯正し、同時に子音結合の発音の矯正を図ることにあると述べている⁽¹¹⁾。加藤氏が述べている歌の活用の有効性についてはさらに具体的に検証する必要があるが、以上の指摘を総合して考えると、プロソディ（「音節の長さ」「声調の高さ」）学習に関して、歌の練習は有効性がある可能性が高い教材であることが窺える。

4、中国語の歌と「歌わない」「歌えない」問題

ところで、英語授業における歌の活用について考察した田邊義隆氏は、教員の中に「学生は歌いたがらない」という意見があるとした上で、学生が「歌えない」のか「歌わない」のかを見極める必要があると指摘する。そして、「歌えない」のであれば、音楽指導のように、パート別練習を取り入れる、テンポを落として練習するなど、指導を工夫する必要があると述べている⁽¹²⁾。学生は「歌わない」のか、「歌えない」のか。この問題は、選曲とその活用方法により、大きく違ってくると考えられる。英語の歌の活用については、早瀬・金冶両氏が、「歌を用いるというのは、一つは学習者の興味を持続させるためである。したがって、英語学習に使用される曲は、学習者が興味を持っている曲であることが肝心である」と述べている⁽¹³⁾。また、古川氏は、中国語の歌の活用について、教員は学生と同じ視線で素材を捜すこと、学生のニーズをキャッチするアンテナを持つこと（ただし、学生に媚びるのではない）が大切であると指摘している⁽¹⁴⁾。こうした指摘から考えると、選曲をするにあたっては、「学生の心にひびく歌」「学生の心を惹きつける歌」であるかどうかという点が重要な条件の一つとなると思われる。

5、中国語の歌に対する学生の関心度

筆者が担当した千葉大学・初修外国語（中国語）の授業（自由選択。教育学部・工学部などの学生が参加）では、当初、中国民歌「太湖船」や邓丽君（テレサ・テン）の「小城故事」などを紹介していたが、学生からポップスも紹介して欲しいとの希望が出されたこともあって、ポップスを紹介することにした。具体的には、（発音練習によさそうな）ゆっくりしたテンポでリズムがとりやすい歌で、（学生にとってより新鮮味がありそうな）日本のポップスのカバー曲ではない歌がよいのではないかと考え、张韶涵（アンジェラ・チャン）の「隠形的翅膀」（透明の翼）や「梦里花」（夢の中の花）、徐若瑄（ビビアン・スー）の「好眼泪坏眼泪」（よい涙わるい涙）、五月天（メイデイ）の「知足」（満ち足りた幸せ）などを紹介・練習した⁽¹⁵⁾。

その後、筆者が行ったアンケートでは、2008年度前期は、受講生29名中22名が、後期は受講生13名中11名が、2009年度前期は受講生45名中36名が歌に関心・興味をもって回答している。例えば以下のような感想が寄せられた。「中国語の歌は新しい歌を習う度、どんどん興味がでてきました。もっと歌を知りたいと思いました」（2008年度後期の受講生より）。「中国語の歌など聴いたことも、もちろん歌ったこともなかったので、とても新鮮で楽しかった。また、みんなで授業中歌って楽しく、いい雰囲気だったし、友達と口ずさんだりも出来楽しかった」「歌を学習に導入したのが面白く、効果的だと感じました」（以上、2009年度前期の受講生より）。なお、法政大学の中国語表現の授業でも同様な授業を行い、同様なアンケートを実施したが、2009年度前期の受講生53名中37名が歌に関心・興味をもって回答している。以上のような学生の反応を見る限りにおいては、学生の多くは「歌わない」のではなく、「歌えない」だけである可能性が高いこと、また、知らない歌でも積極的に歌おうとしていることが分かる。また、最初は小さかった学生の声が練習

するごとに大きくなってゆく傾向がみられたので、最初に学生があまり歌わない時も学生が「歌いたくない」わけではない可能性があるように思われる。ただ、どこまで普遍的にこうした傾向がみられるのかということについてはさらに検証してみる必要がある。

6、中国語の歌の授業での活用方法

さて、田邊氏が述べるように、「歌えない」だけなのであれば、単に紹介するだけではなく、歌えるように練習することが必要であると考えられる。筆者の担当授業では、歌詞を見ながら歌を聴いた上で、歌を聴きながら歌う練習を学生にしてもらい、さらにその後伴奏なしで歌う練習（合唱）をしてみた。そして、その次の授業でも再度同様な練習をし、その後の授業でも適宜伴奏なしで歌う練習を行った⁽¹⁶⁾。こうした授業に対する学生の反応についてであるが、上記以外に例えば以下のような感想が寄せられた。「歌で何となく覚えられた単語もあったので、歌を歌うことはとても有意義でした」「授業以外でも友達とよく歌っていました」（以上、千葉大学・2008年度後期の受講生より）。「歌で中国語が自然と口に出るような気がしました。授業以外でも口ずさむことがあったりして、中国語をととても身近に感じられたと思います。中国人の留学生にちょっと歌ったら、「ちゃんと通じるよ」といわれたので、歌を覚えることは良いと思います」「単語を覚えたりするのに楽だったのでとても効果的だったと思います」（以上、千葉大学・2009年度前期の受講生より）。以上の内容から、①学生が歌を好きになり自主学習をしていること、②何回も練習するのが苦になっていないこと、③練習の結果、学生が中国語（歌詞）を口ずさめるようになっていくことが窺える。表音文字ではない中国語の文字（漢字）を音声（ピンイン）として認識し、プロソディを習得する際には、「音読」学習が必要不可欠と思われるが⁽¹⁷⁾、歌が「学生の多くが発音練習をしたがる」教材であることを考えると、「声調みだれ」などの問題があっても、活用する価値はあると考えられる。

7、ポップスの歌詞と初級中国語の授業

以上のように発音学習に活用できる可能性をもつポップスであるが、その歌詞の文章について言えば、初級レベルを超えた単語がある、歌特有の表現があるなどの問題もある⁽¹⁸⁾。しかし、歌詞が初級の文法・語彙学習と連動させられるものを選べば、（上記の学生の感想にもあるように）初級文法・語彙学習の強化につながると思われる。その効果の検証までには至っていないが、筆者の担当授業では、現在、空欄つきの歌詞プリントを作成・使用するなど、文法・語彙学習と連動させる試みも行っており、こうした工夫は今後さらに必要であると考えられる。また、初級中国語では、文字学習以前に、ピンインを読めるようにすることが重要な課題となっている。この点に関して言えば、「声調みだれ」があまり多くない歌を使うなど工夫をすれば、歌は効果的な教材になると思われる。さらに、中国語教育で必要な中国文化（異文化）理解という観点から考えれば、歌詞の内容などが中国の社会や人々の生活の理解につながるものがあれば、ポップス以外も含めそうした歌を導入する作業も有用であると思われる。

8、おわりに

以上、本稿では、不勉強な点も多いと思われるが、主に大学の初級中国語授業における歌の活用の有効性について考察してきた。その結果、中国語の歌（ポップス）は、教材としては、「声調みだれ」、初級レベルを超えた単語があるなどの問題があるが、「学生の心にひびく歌」を選び、反復練習（合唱）を行えば、学生の多くが非常に関心・興味を示し、進んで自主学習を行う教材であること、また、ピンイン学習やプロソディ（「音節の長さ」「声調の高さ」）習得、文法・語彙習得の強化に効果がある可能性があることが分かった。ただし、その具体的効果は今後さらに検証する必要がある。

本稿の内容を踏まえて、大学の初級中国語の授業における歌の活用の目的を考えると、「中国語に対する関心の向上」「発音（ピンイン・プロソディ）学習の強化」「初級文法・語彙学習の強化」「中国文化（異文化）理解の促進」となる。また、歌の選定の目安を考えると、「ポップス系の歌」「リズムがとりやすい歌」「声調みだれ」「ピンインみだれ」があまりない歌」「初級文法・語彙学習と連動させやすい歌」「中国文化理解につながる歌（ポップス以外も含む）」ということになると思われる。これに加えて、中国人との交流を考えれば、なるべく「中国・台湾でヒットした歌」の方がよいように感じられる。

なお、本稿では、主に初級の授業での歌の活用について考えてきたが、中級・上級の授業ではさらにいろいろな活用方法が可能であると思われる⁽¹⁹⁾。また、本稿で紹介した活用方法はごく初歩的なものでしかなく、筆者が不勉強なだけで、初級の授業でも、もっと効果的な活用がすでに行われている可能性が高いと思われる。読者の方々のご教示を賜れば幸甚である。

註

- (1) 一般に、中国・台湾・香港のポップスを総称して、チャイニーズ・ポップス、C-POPなどと言っている。多くの歌は中国語（普通話）と広東語で歌われている。日本や韓国の歌のカバー曲もある。中国の流行歌については、石井康一「中国語の歌にみる異文化としての中国—中華人民共和國の愛唱歌を中心に—」（『言語と文化（甲南大学）』4、2000年）等参照。
- (2) 古川典代「ソフトアプローチの中国語教育法—歌や映画・ドラマなどを素材として」（『中国語教育』2、2004年）。
- (3) 古川前掲論文、俞稔生「中国語教育における中国の歌の効用について—中国語の歌的要素を発音練習に取り入れる試み—」（『現代社会学部紀要（長崎ウエスレヤン大学）』5-1、2007年）等参照。中国語の歌に関する教材としては、例えば以下のものがある。神部明世・池田巧『ヒット曲で覚えるアジアのことはVol.2北京語』（雷鳥社、2000年）。松尾隆・加藤徹『中国語で歌おう！J-POP編』（アルク、2007年）。ファンキー末吉・古川典代『中国語で歌おう！—カラオケで学ぶ中国語—』（アルク、2000年）。古川典代『中国語で歌おう！決定版テレサ・テン編』（アルク、2008年）。呉越華『覚えておきたい中国語の歌』（中経出版、2005年）。

- (4) 以下の文献等参照。田邊義隆「英語授業における歌の活用に関する理論的概観とその実践」(『近畿大学語学教育部紀要』3-2、2004年)。角山照彦「英語教育における音楽教材の活用」(『広島文教女子大学紀要』36、2001年)。早瀬光秋・金冶隆司「英語学習の指導における「かな表記」による英語ポピュラー・ソングの導入—特に英語の音とリズムの習得における活用と効果について—」(『三重大学教育実践総合センター紀要』25、2005年)。飛渡洋「歌を利用した大学生用英語テキストについて」(『日本獣医畜産大学研究報告』51、2002年)。
- (5) 俞前掲論文。
- (6) 神部・池田前掲書10頁。
- (7) ファンキー・古川前掲書31頁。
- (8) 望月八十吉『中国語と日本語』(光生館、1974年)音声編、1。同・高維先『中国語学習のポイント(4版)』(光生館、1979年)発音編、10・11。詳細については、檀山健介「中国語のストレス(重音)とその教学方法について」(『早稲田商学』348、1991年)、塚本尋「現代中国語(普通話)のポーズとストレス」(『杏林大学外国語学部紀要』6、1994年)、重松淳「中国語イントネーション研究の現状」(『音声研究』11-2、2007年)等参照。
- (9) 塚本前掲論文、古川典代『中国語シャドーイング入門』(DHC、2005年)23-24頁等参照。
- (10) 松尾・加藤前掲書52-53頁。
- (11) 早瀬・金冶前掲論文。角山照彦氏は、自然な発話で生じる様々な音声変化の習得を目的とした音楽関連教材の開発も行っている(角山前掲論文参照)。
- (12) 田邊前掲論文。角山前掲論文等参照。
- (13) 早瀬・金冶前掲論文。
- (14) 古川前掲論文。
- (15) 拙稿「中国語教育における中国文化紹介の試み」(『言語文化論叢(千葉大学)』3、2009年)参照。
- (16) 前掲拙稿参照。
- (17) 胡玉華『中国語教育とコミュニケーション能力の育成』(東方書店、2009年)144-145頁等参照。
- (18) 神部・池田前掲書12頁参照。
- (19) 古川前掲論文等参照。

[追記] 本稿で述べた歌の活用を行う際には、李林静氏にご助言頂いた。また、本誌査読者より有益なご教示を頂いた。厚く御礼申し上げます。